磯に生きるを灯す

東日本大震災で震源に一番近かった町、鮎川を扱う。
自分の地元宮城県の一部であるこのまちに、調査で初めて訪れた。
そこで見たのは、海とともに力強く生きる人々の姿である。

「せっかくだからクジラの解体見ていきなさいヨォ。」
「なんぼでも見ていったらいいべさ、ただなんだから。」

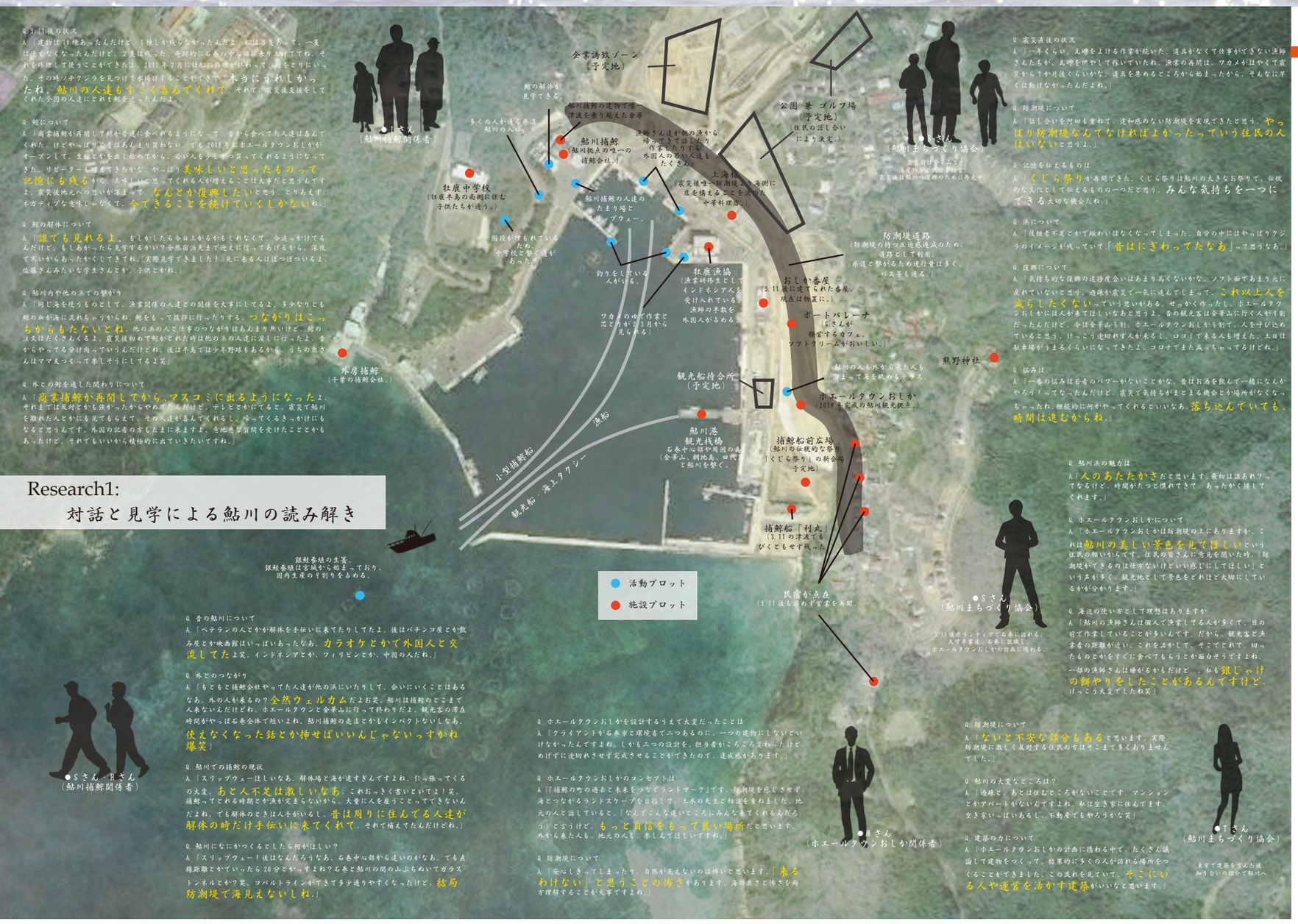
なまものを見ることの鮮烈な体験と、
対話から分かる鮎川のリアルが新鮮で、楽しかった。
画一的な復興計画と減っていく人口の中で、
未来を模索ながら必死に生きる人々を、対話と体験から照らし出す。
そのための場所を紡いでいく。

敷地 / SITE

東日本大震災で震源に一番近かった町、宮城県の鮎川を扱う。鮎川は私の地元の仙台から電車とバスを乗り継いで二時間、太平洋に突き出した半島の先端にある。復興の最中であるこの町は、人不足や高齢化に悩まされながらも力強く前に進んでいる。2019 年に商業捕鯨が再開し、盛り上がってきている捕鯨基地の顔、豊かな海の幸をとる漁港としての顔、金華山への入口としての観光地の顔...

様々な顔を持つこの町は観光客に加えて研究員や外国人の技能実習生も出入りし、鮮やかな各人の生活が描き出される。二回現地を訪れ、対話を中心としてリサーチを行った。これはインターネットの情報からは得られない、リアルな鮎川の記録である。

Research1: 対話と見学による鮎川の読み解き



Q. 3.11 後の状況
A.「建物は 10 棟あったんだけど、1 棟しか残らなかったんだよ。船は 3 隻あって、一隻は使えなくなったんだけど、2 隻は残った。奇跡的に石巻の中小造船会社が直してくれて、それを修理して使うことができたよ。2011 年 7 月に社員の修理が終わって、漁をとりにいった。その時ツチクジラを見つけて水揚げすることができて、**本当にうれしかったね。鮎川の人達も十分に喜んでくれて**、それで、震災後支援をしてくれた全国の人達にとれた鯨を送ったんだよ。」

Q. 鯨について
A.「商業捕鯨が再開して鯨が学校に食べれるようになって、昔から食べて育った人達は喜んでくれた。けどやっぱり若者はあんまり買わない。でも 2019 年にホエールタウンおしかがオープンして、生鯨とかを出し始めてから、若い人も少しずつ買ってくれるようになってきた。リピーターの確保できたかな。やっぱり**美味しいと思ったものって記憶にも残る**から。美味しいと思ってくれる人が増えることは大事だと思うんですよ。震災後地元への思いが深まって、**なんとか復興したい**と思う。とりあえず、ネガティブな意味じゃなくて、**今できることを続けていくしかない**ね。」

Q. 鯨の解体について
A.「**誰でも見れるよ**。もしかしたら今日上がるかもしれなくて、今述っかけてるんだけど。もしあがったら見学するかい？全然宿泊先まで送えに行ってあげるから。深夜で大いからあったかくしてきてね。（実際見学できました！）見に来る人はぱっぱいるよ。佐藤さんみたいな学生さんとか、子供とかね。」

Q. 鮎川内や他の浜での繋がり
A.「同じ海を使うものとして、漁業関係の人達との関係を大事にしてるよ。多少なりとも鯨の血が海に流れちゃうからね。鯨をもって接拶に行ったりする。**つながりはこっちからもたないとね**。他の浜の人と仕事のつながりはあんまり無いけど、鯨の注文はたくさんくるよ。震災後初めて鯨がとれた時は他の浜の人達に渡しに行った。昔からやってる分け肉っていうんだけどね。後は千葉では少年野球もあるから、うちの息さんはママ友っって楽しそうにしてるよ笑」

Q. 外との鯨を通した関わりについて
A.「**商業捕鯨が再開してから、マスコミに出るようになった**よ。それまでは反対とかも強かったからやめてたんだけど、テレビとかにでると、震災で鮎川を離れた人とかにも見てもらえて、その人達がまたくるようになって、帰ってくるきっかけにもなると思うんです。外国の記者の方もたまに来ますよ。色地感覚質問を受けたこととかもあったけど、それでもいいから積極的に出ていきたいですね。」

Q. 昔の鮎川について
A.「ベテランの人とかが解体を手伝いに来てたりしてたよ。後はパチンコ屋とか飲み屋とか映画館はいっぱいあったなあ。**カラオケとかで外国人と交流してた**よ笑。インドネシアとか、フィリピンとか、中国の人だね。」

Q. 外とのつながり
A.「もともと捕鯨会社やってた人達が他の浜にいたりして、会いにいくことはあるなあ。外の人が来るのっ？**全然ウェルカム**だよお笑。鮎川は捕鯨のどこまで人来ないんだけどね。ホエールタウンと金華山に行って終わりだよ。観光客の滞在時間がやっぱ石巻全体で短いよね。鮎川捕鯨の売店とかもインパクトないしなあ。**使えなくなった話とか挿せばいいんじゃないっすかね爆笑**」

Q. 鮎川での捕鯨の現状
A.「スリップウェーはしいなあ。解体場と海が遠すぎんですよね。引っ張ってくるの大変。**あと人不足は激しいなあ**。これおっきく書いといてよ！笑。捕鯨ってどれる時期とか漁が定まらないから、大変に人を雇うことってできないんだよね。でも解体のときは人手がいるし、**昔は周りに住んでる人達が解体の時だけ手伝いに来てくれて**、それで捕えてたんだけどね。」

Q. 鮎川になにかつくるとしたら何がほしい？
A.「スリップウェー！後はなんだろうなあ。石巻中心部から遠いのがなあ。でも直線距離とかでいったら 20 分とかっすよねウ石巻と鮎川の間の山ぶちぬいてガラストンネルとかウ笑。コバルトラインができて多少通りやすくなったけど、**結局防潮堤で海見えないしね**。」

Q. 3.11 後ボランティアで石巻に訪れる。大学卒業後、石巻に拠点。ホエールタウンおしかの計画に携わる。

Q. 震災直後の状況
A.「一年くらい、瓦礫を上げる作業が続いた。道具がなくて仕事ができない漁師さんたちが、瓦礫を燃やして稼いでいたね。漁業の再開は、ワカメがはやくて震災から 1 か月後くらいかな。道具を集めるところから始まったから、そんなに早くは動けなかったんだよね。」

Q. 防潮堤について
A.「話し合いを何回も重ねて、違和感のない防潮堤を実現できたと思う。**やっぱり防潮堤なんてなければよかったっていう住民の人はいない**と思うよ。」

Q. 記憶を伝えるものは
A.「**くじら祭り**が再開できた。くじら祭りは鮎川の大きなお祭りで、伝統的な文化として伝えるものの一つだと思う。**みんな気持ちを一つにできる**大切な機会だね。」

Q. 浜について
A.「後継者不足とかで廃れいはなくなってしまった。自分の中にはやっぱりクジラのイメージが残っていて、「**昔はにぎわってたなあ**」って思うなあ。」

Q. 復興について
A.「気持ち的な復興の進捗度合いはあまり高くないかな。ソフト面であまり元に戻れていないと思う。過疎が震災で一気に進んでしまって、**これ以上人を減らしたくない**っていう思いがある。せっかく作った、ホエールタウンおしかには人が来てほしいなあと思うよ。昔の観光客は金華山に行く人が半割だったんだけど、今は金華山も割、ホエールタウンおしかも割で、人を呼び込めていると思う。けっこう走り抜ける人が来るし、ロコミで来る人も増えた。土日は駐車場がうまるくらいになってきたよ。コロナでまた減っちゃってるけどね。」

Q. 悩みは
A.「一番の悩みは若者のパワーがないことかな。昔はお酒を飲んで一緒になんかやろう！ってなったんだけど、震災で気持ちがまとまる機会とか場所がなくなっちゃったね。積極的に何かやってくれるといいなあ。**落ち込んでいても、時間は進むからね**。」

Q. 鮎川浜の魅力は
A.「**人のあたたかさ**だと思います。最初は温あれ？ってなるけど、時間がたつと慣れてきて、あったかく接してくれます。」

Q. ホエールタウンおしかについて
A.「ホエールタウンおしかは防潮堤の上にありますが、これは**鮎川の美しい景色を見てほしい**という住民の願いからです。住民の皆さんに意見を聞いた時、「防潮堤ができるのは仕方ないけどいい感じにしてほしい」という声が多く、観光地として景色をどれほど大切にしているかがかります。」

Q. 海辺の使い方として理想はありますか
A.「鮎川の漁師さんは個人で漁業してる人が多くて、目の前で作業しているこどが多いんです。だから、観光客と漁業者の距離が近い。これを活かして、そこでとれて、切ったものとかをすぐに食べてもらうとか面白そうですよね。一部の漁師さんは嫌がるかもだけど…。私も**銀じゃけの餌やりをしたことがあるんですけど**、けっこう大変でしたね笑」

Q. 防潮堤について
A.「**ないと不安な部分もある**と思います。実際、防潮堤に激しく反対する住民の方はそこまで多くありませんでした。」

Q. 鮎川の大変などころは？
A.「過疎と、あとは住むところがないことです。マンションとかアパートがないんですよね。私は空き家に住んでます。空き家いっぱいあるし、不動産でもやろうかな笑」

Q. 建築の力について
A.「ホエールタウンおしかの計画に携わるやて、たくさん議論して建物をつくって、結果的に多くの人が訪れる場所をつくることができました。この流れを見ていて、**そこにいる人や運営を活かす建築**がいいなと思います。」

Q. 防潮堤について
A.「安心しきってしまったり、自然が見えないのは怖いと思います。「**来るわけない**」**と思うことの怖さ**があります。海の良さと怖さを両方理解することが大事ですよね。」

リサーチ→分析 / Research→Analysis

リサーチで得られたことを分析する。　鮎川と時間、海、人の関係がみえてくる。

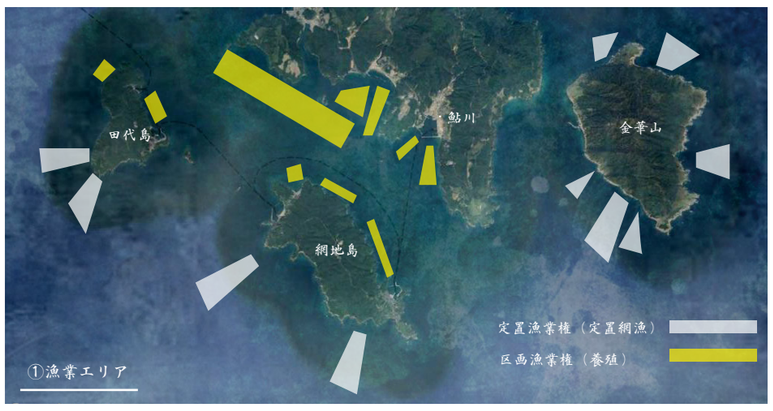
Analysis1: 海と生きる

海に面する鮎川は、昔から海との強いつながりの中にあった。海が与えてくれる豊かな食材とその美しい風景を享受し、時に考を恐くその自然の力の恐ろしさを理解する。**海と海の生き物達を恐れ敬い**、鮎川の人々は海とともに生きてきたのである。

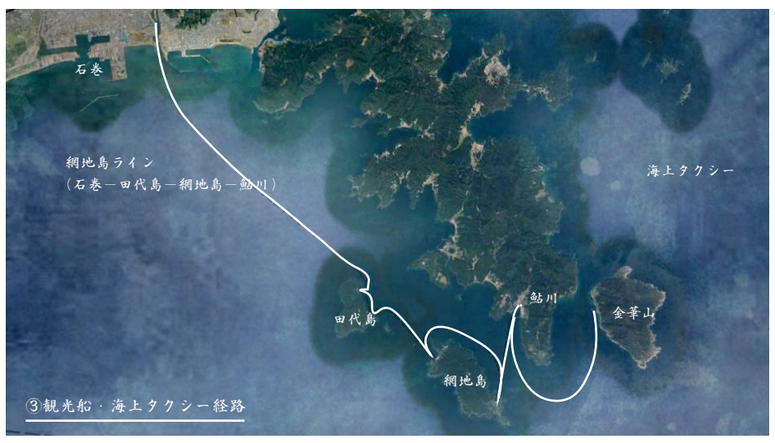
聞き取りを含む現地調査から、鮎川と海の繋がりを 3 つに分類した。加えて会話のプロットを行った。これらから、**人々の生活の核は海側にある**と分かる。

水に手が届くほどの距離から日本の半分に渡る広さまで、鮎川は海とのつながりを持つ。「**津波がきて急ないから、こんな土地にはもう住まない。**」そんな単純な言葉では片付けることができない程、人々の生活と仕事は、海とともにある。

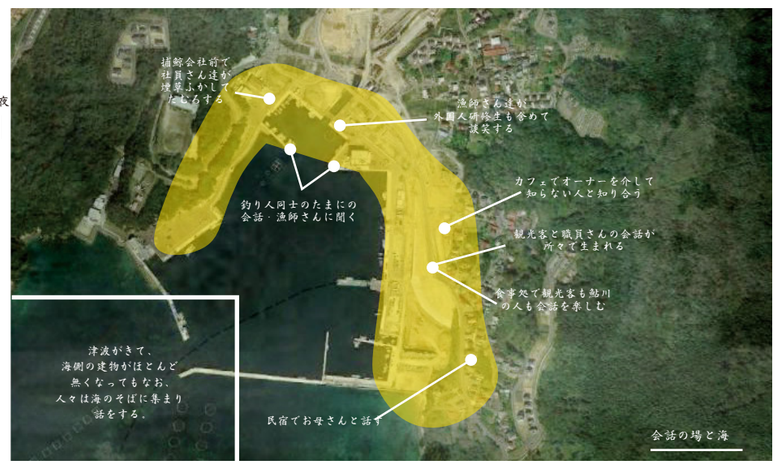
②捕鯨船操業域



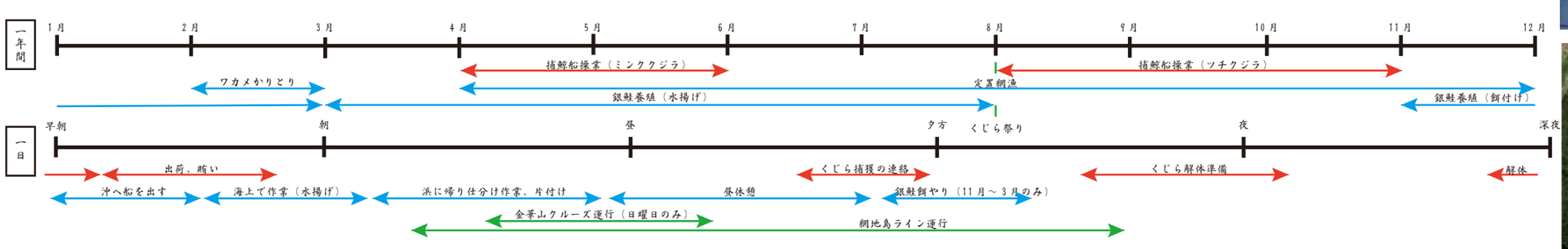
①漁業エリア



③観光船・海上タクシー経路



Analysis2: 鮎川の生活と時間



Analysis3: 人の多様性

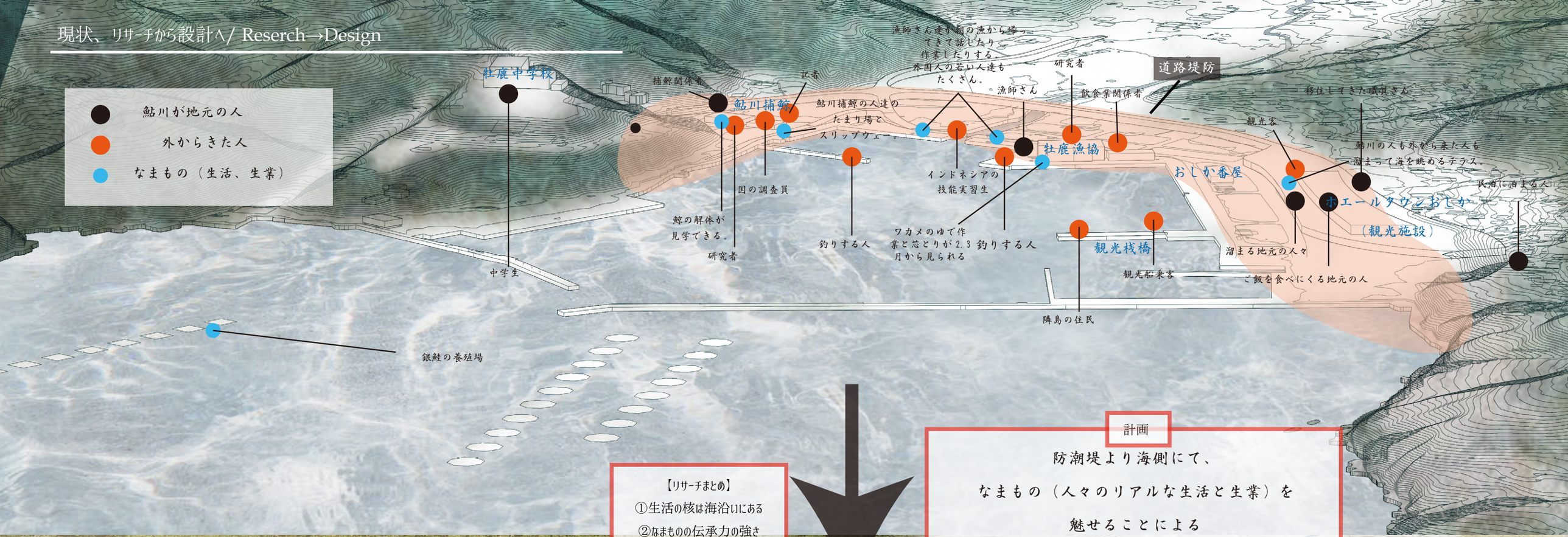
鮎川は半島の先端に位置するにも関わらず、
多種多様な人々が出入りする。

- 鮎川捕鯨社員さん
- 昔の捕鯨関係者
- 浜を散歩するお母さん達
- 観光客
- 国の調査員
- 記者

- 研究者（学生含）
- 漁師さん
- 外国人漁業研修生
- 漁師さんの家族
- 他の地域の漁業、飲食業関係者
- 周囲の島や石巻に住む人々

- ホエールタウンの職員さん
- 移住者（職員）
- 語り部
- ホエールタウン利用者（地域住民）
- 県道をとおる住民
- 中学生（他の浜の子供たちも含む）

現状、リサーチから設計へ/ Reserch→Design

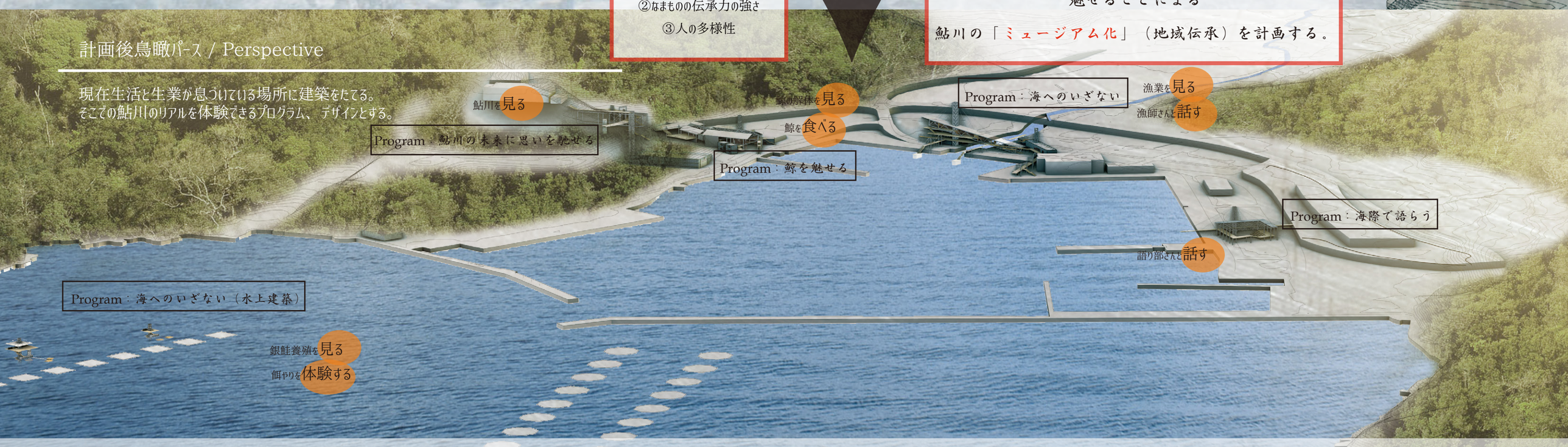


【リサーチまとめ】
①生活の核は海沿いにある
②なまものの伝承力の強さ
③人の多様性

計画
防潮堤より海側にて、
なまもの（人々のリアルな生活と生業）を
魅せることによる
鮎川の「ミュージアム化」（地域伝承）を計画する。

計画後鳥瞰パース / Perspective

現在生活と生業が息づいている場所に建築をたてる。
そこでの鮎川のリアルを体験できるプログラム、デザインとする。



なまものを魅せる四つのプログラム

①現在のハコである鯨解体場をひらき、鯨の解体を魅せていく

Program：鯨を魅せる

②何もない漁師さんの作業場に番屋をつくり、漁師コミュニティを再生させつつ漁を魅せる

Program：海へのいざない

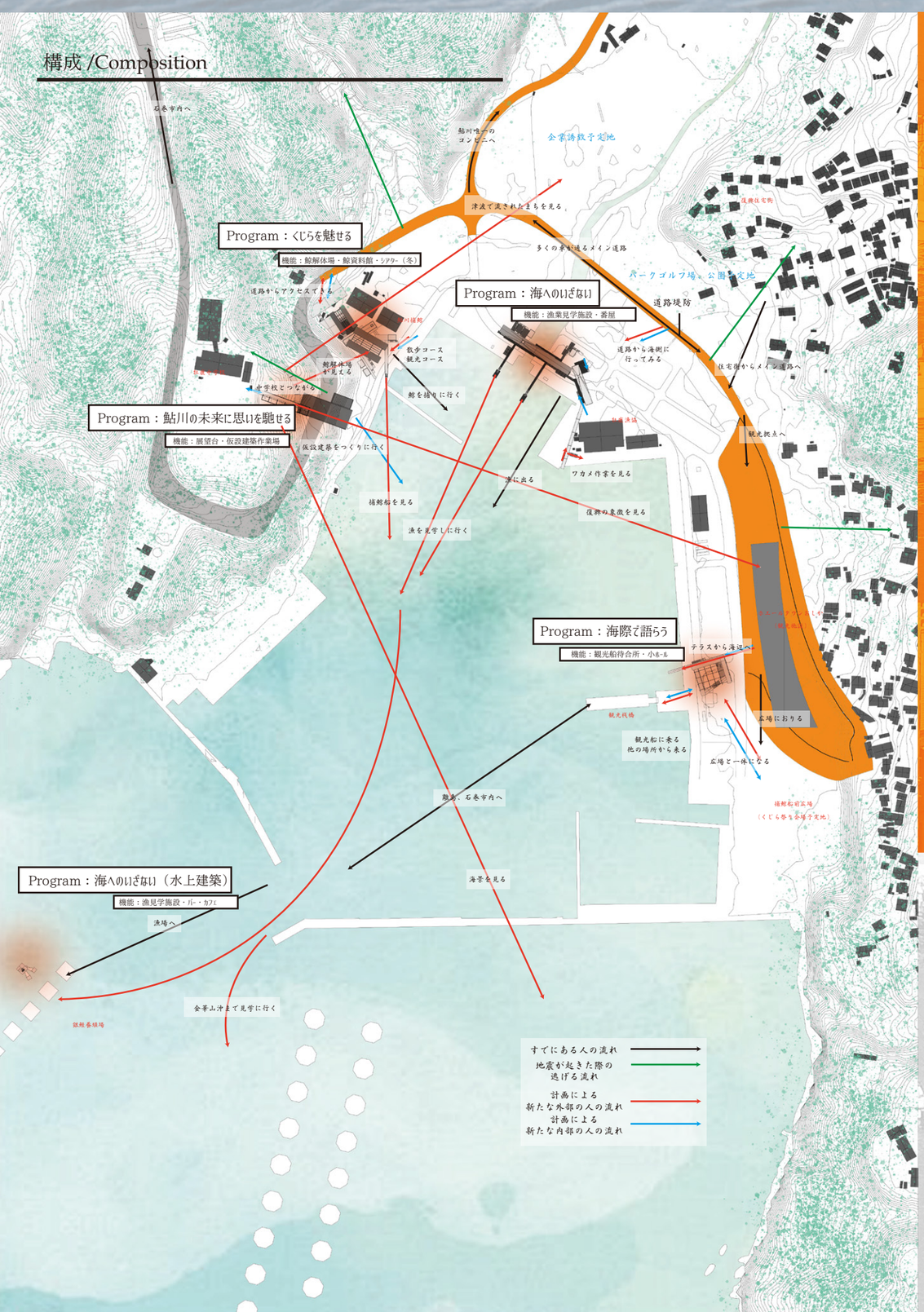
③観光施設のテラスから船着き場の間にホールをつくり、海辺での集合的な語らいを誘発する

Program：海際で語らう

④鮎川の入口でもある山肌にて鮎川を見渡す

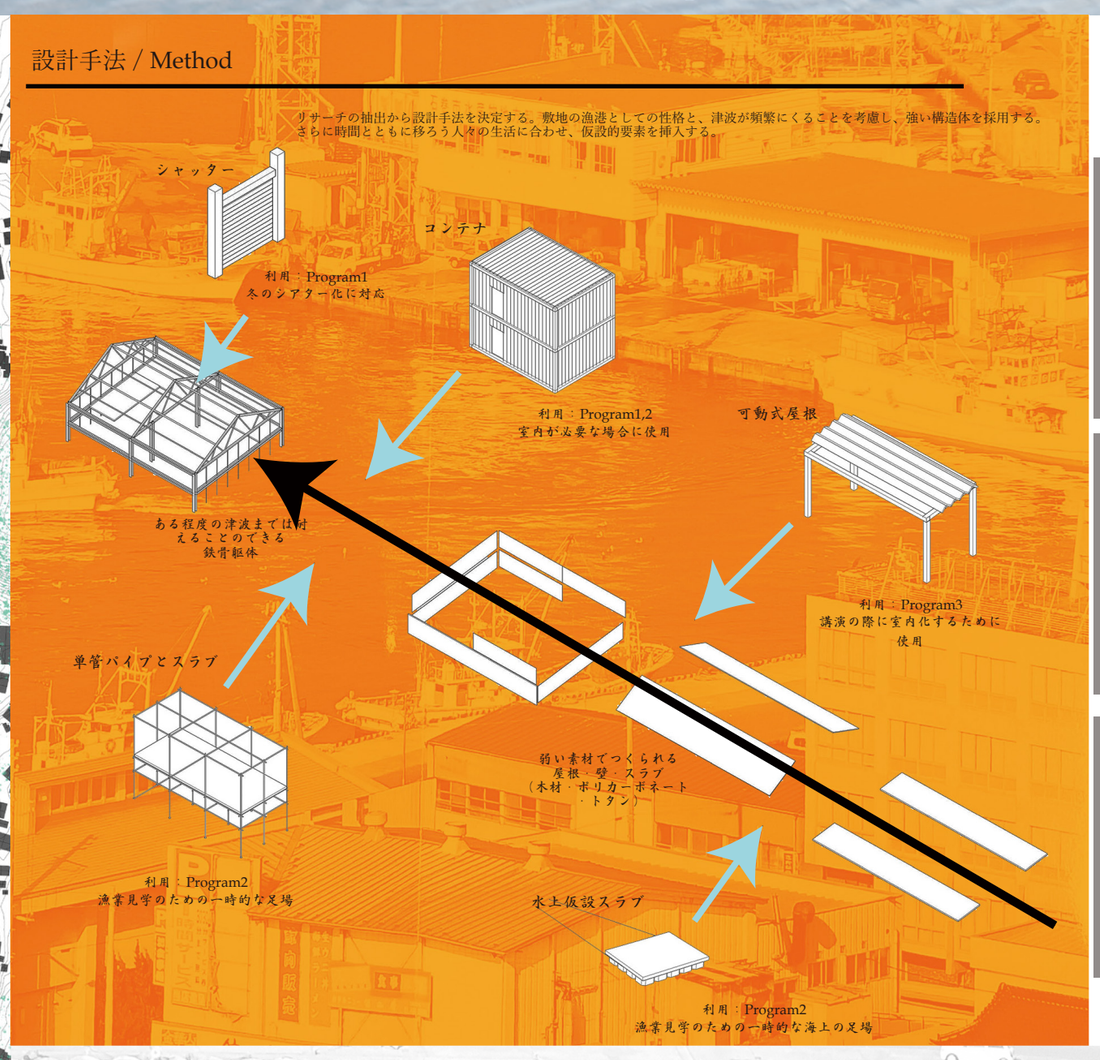
Program：鮎川の未来に思いを馳せる

構成 /Composition

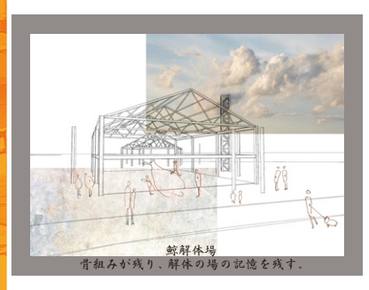


設計手法 / Method

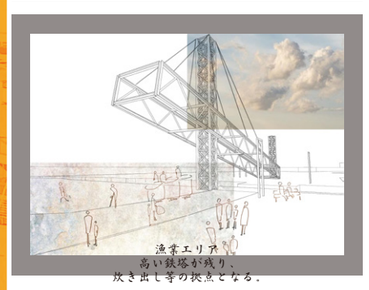
リサーチの抽出から設計手法を決定する。敷地の漁港としての性格と、津波が頻繁にくることを考慮し、強い構造体を採用する。
さらに時間とともに移ろう人々の生活に合わせ、仮設的要素を挿入する。



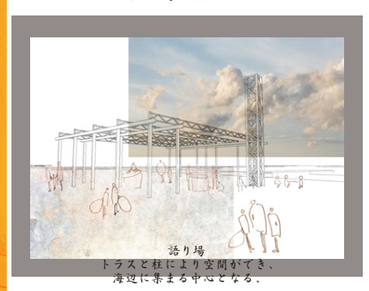
いつかまたおこる震災後の風景



鯨解体場
骨組みが残り、解体の場の記憶を残す。



漁業エリア
高い鉄塔が残り、
炊き出し等の拠点となる。



語り場
トラスと柱により空間ができ、
海辺に集まる中心となる。

Ⅰ.構造体が露出する

Rsearch→抽出：鮎川の「漁港」としての顔と震災直後の風景

震災前の鮎川の海辺
白い鉄骨の構造体が目立つ、漁港らしい雰囲気を持つ。

震災直後の鮎川
鉄骨の構造体とコンクリートの建物は辛うじて残る。

昔の鯨解体場
大きい倉庫で行われていた。素朴な質感が目立つ。

津波で流されることを想定し、躯体のみ頑丈につくる。再建しやすいよう、スケルトンインフィルを前提として設計する。昔の鮎川に見られた鯨解体場の倉庫や鉄塔を踏襲し、それらをベースにデザインした。鉄骨の力強さと背景の美しい自然が調和するよう調整し、また構造体を露出させることで、建築の周囲における視線の抜けを確保した。防潮堤でまちと隔てられた浜に建築を建てる上で、それらが壁にならず空間をつくることを目指す。

Ⅱ.仮設的要素を付与する

Rsearch→抽出：時間とともに移ろう生活と生業

鯨の解体
春から秋にかけて行われる。
揚らえた場所にもよるが、
深夜になることもしばしば。

銀鮭養殖
冬から夏にかけて行われる。
早朝に漁に出る。
餌やりは早朝と夕方の二回。

観光客の移り
雪が降るため、
観光客は春から秋に多い。
市内から離れたところにあるため、
夕方には帰る人が多い。

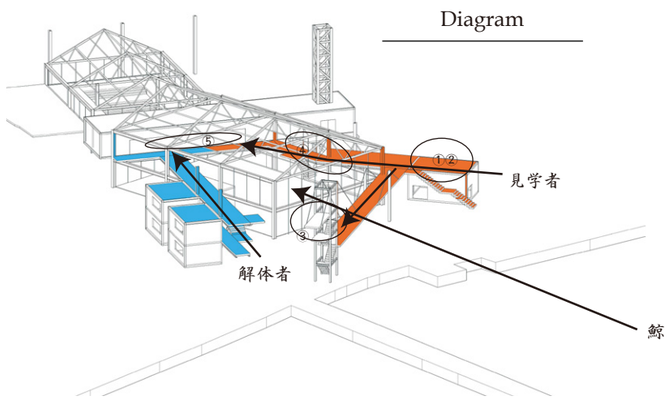
時期によって建築の使い方が変わることを考慮し、仮設的要素を取り入れる。各プログラムに合わせて五種類の仮設要素を考えた。これらにより場所の付与や内部空間の挿入が可能となる。時期による作業内容や観光客の多さに応じて、仮設空間の使用可否を決める。さらに水上にも仮設建築を採用することで、特別性とイベント性を付与する。

SITE：現鮎川捕鯨解体場

機能：鯨解体場・鯨資料館・シアター（冬）

【見学手順設定】
①鯨がとれた情報を聞いて人が集まる
②鮎川内外の人が一緒になってカフェでお茶を飲みつつ、
　解体の時間を待つ
③物見台から捕鯨船の到着を見る
④解体を見る
⑤最後に食堂で賄いをみんなで食べる

Diagram

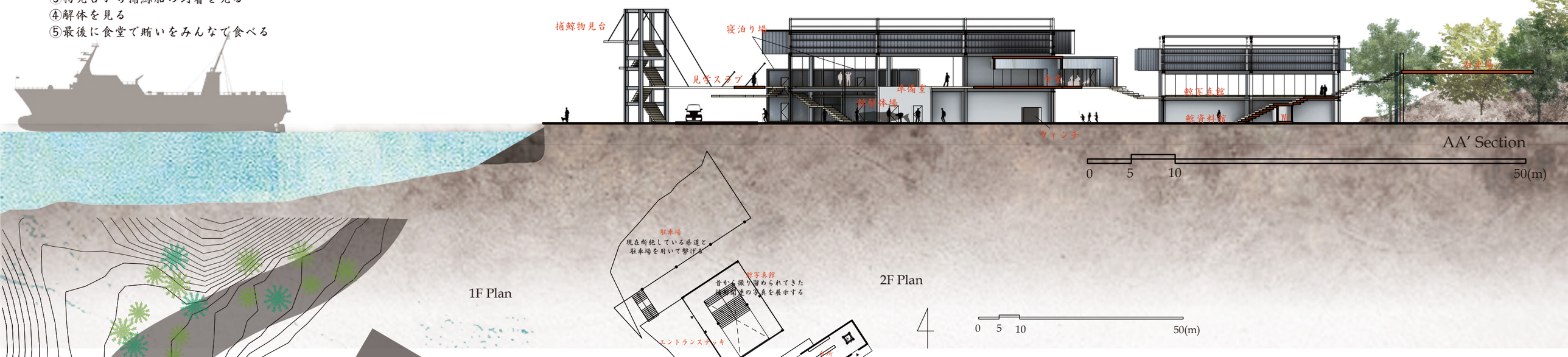


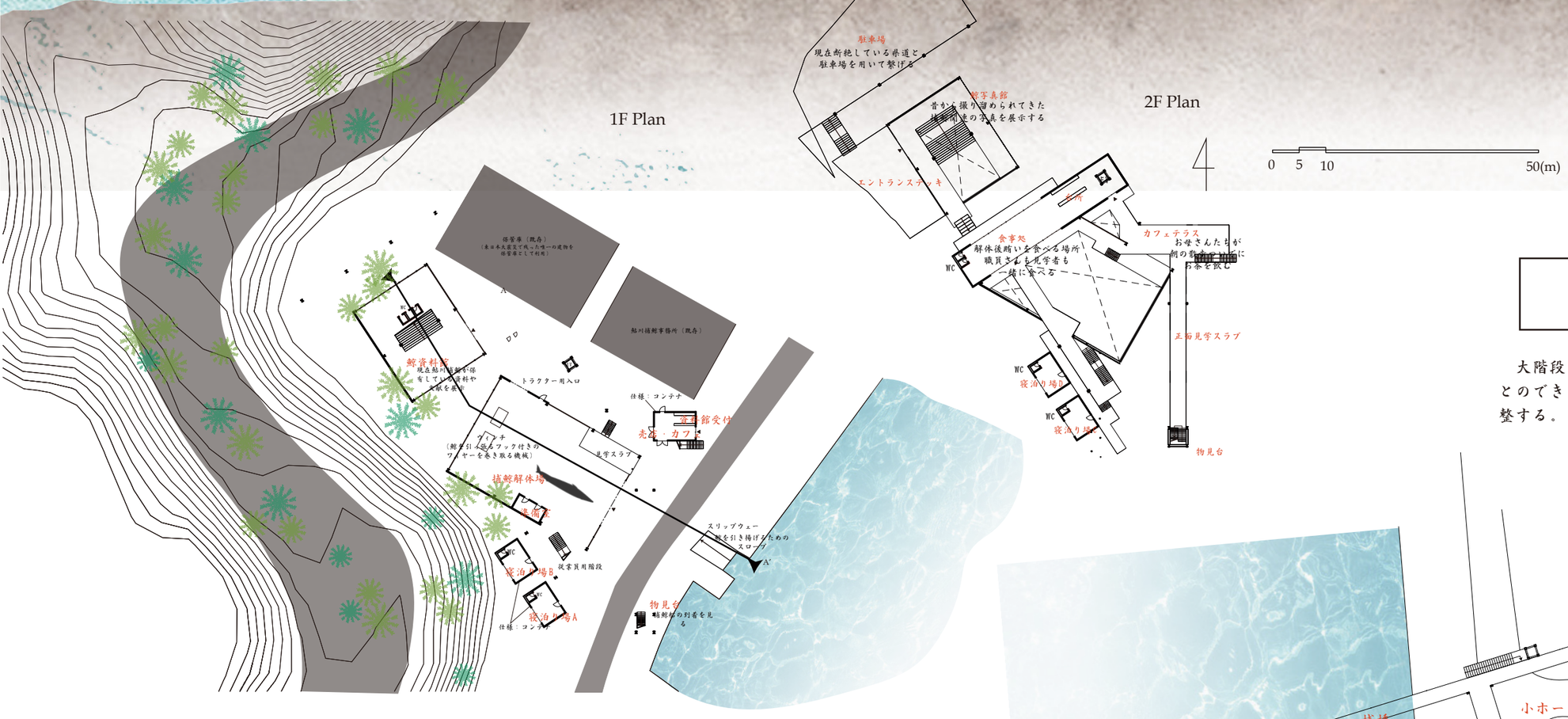
Program：鯨を魅せる

現在閉じた箱である鯨解体場を、
外に開いた形にデザインしなおす。

実際の見学をもとに流れを設定し、
それに合わせて室を配置する。

参考：昔の鯨解体場倉庫

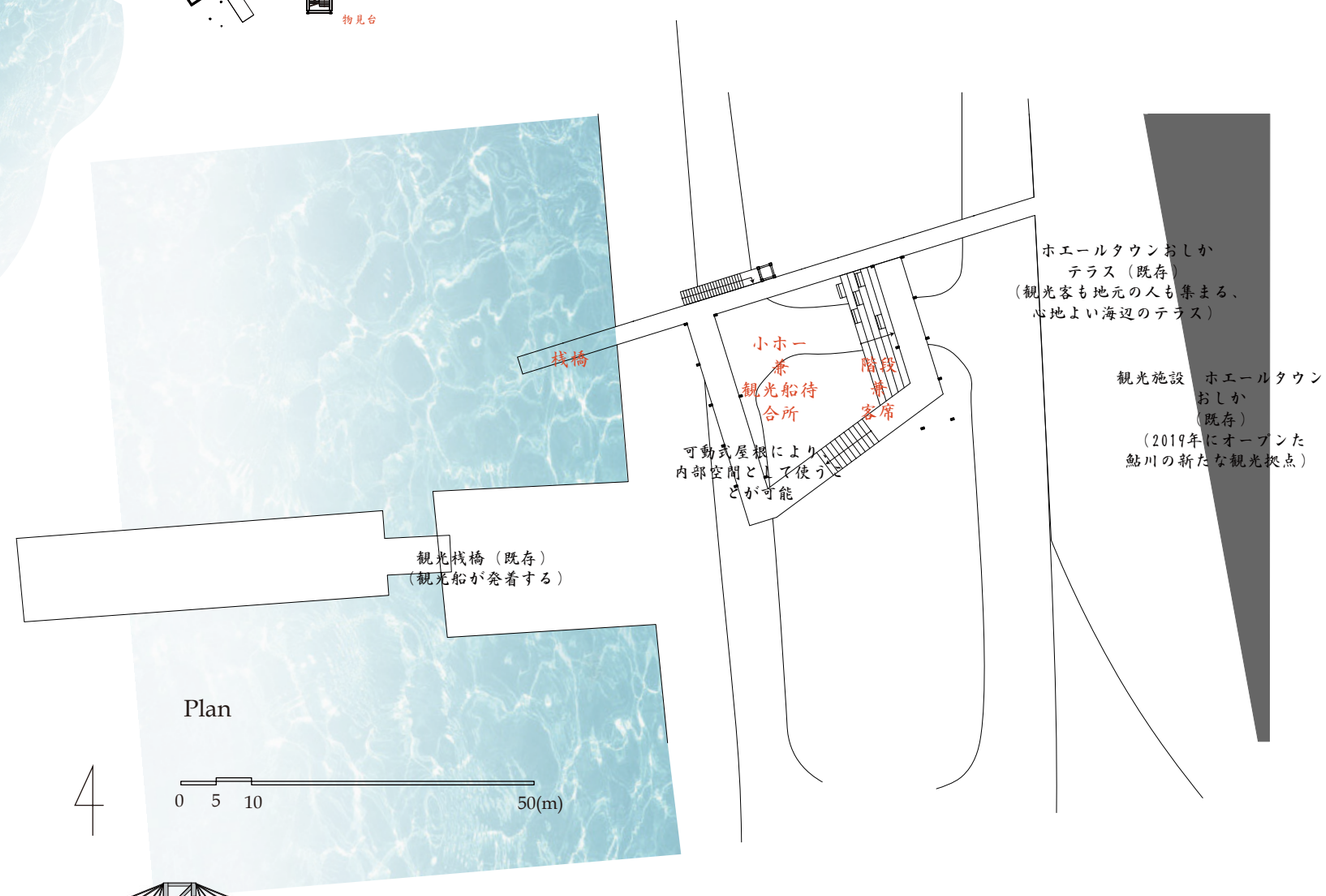


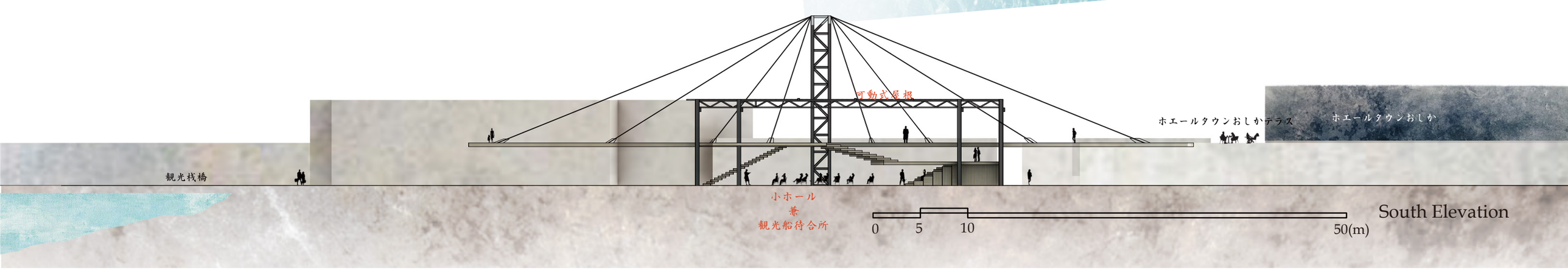


Program：海際で語らう

大階段と柱により、観光施設と観光桟橋の間に人が集まることのできる空間をつくる。可動式屋根により、内部と外部を調整する。

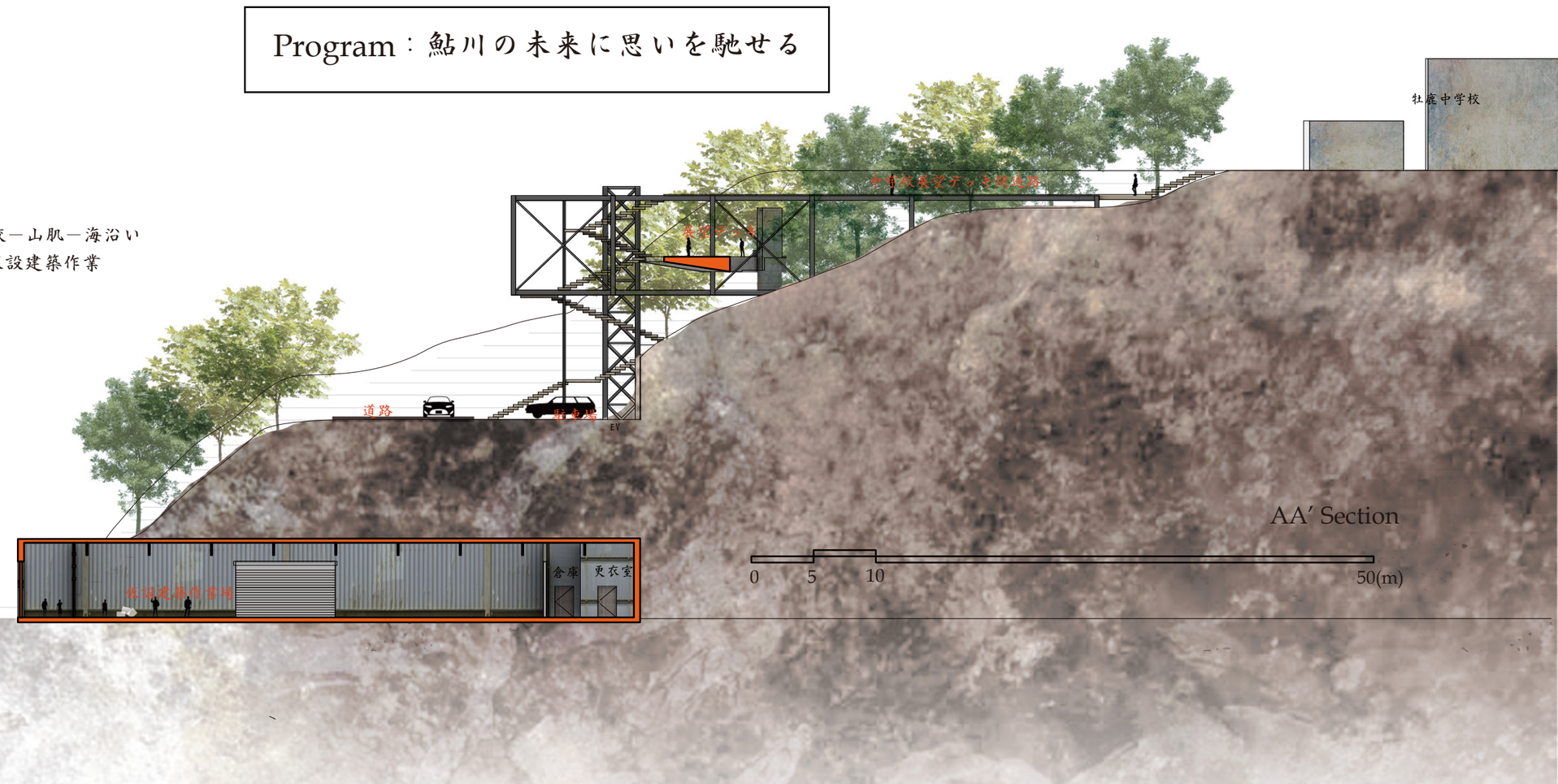
機能：観光船待合所・小ホール
SITE：ホエールタウンおしかテラス前ー観光桟橋





Program：鮎川の未来に思いを馳せる

SITE：牡鹿中学校ー山肌ー海沿い
機能：展望台・仮設建築作業場

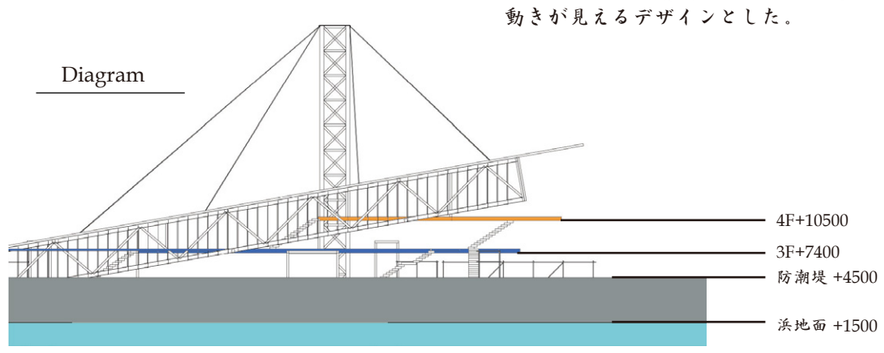


Program：海へのいざない

SITE：現牡鹿漁協前（浜中央部）
機能：漁業見学施設・番屋

津波で流され、現在は漁船がとまり作業をするスペースがあるだけの海辺に、番屋機能を中心とした建築をたてる。鉄骨にガラス張りをの構成をとり、防潮堤より陸側からも漁師さんの動きが見えるデザインとした。

Diagram



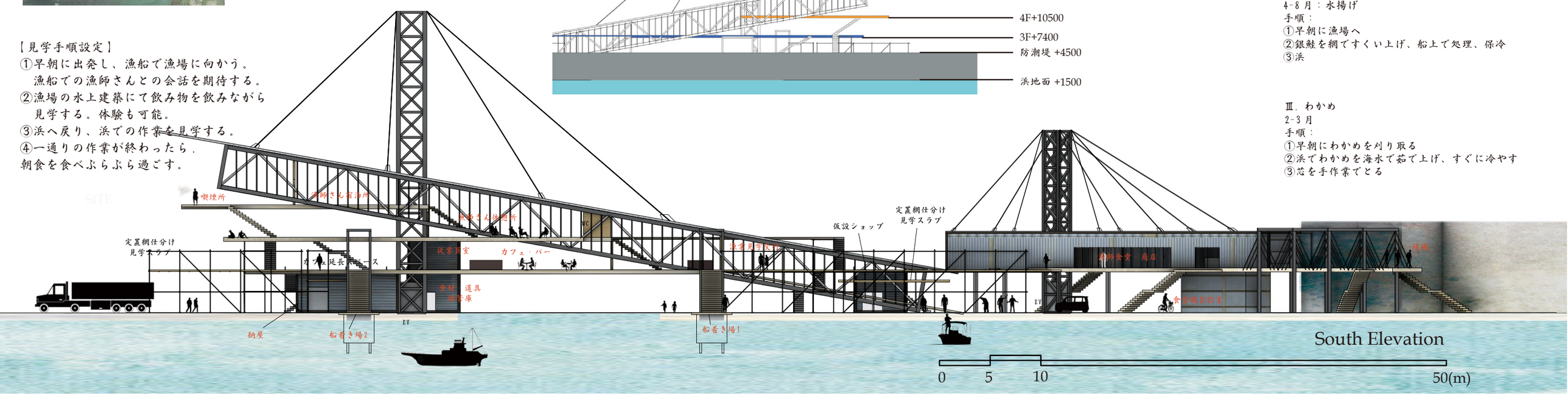
【見学手順設定】
①早朝に出発し、漁船で漁場に向かう。
　漁船での漁師さんとの会話を期待する。
②漁場の水上建築にて飲み物を飲みながら
　見学する。体験も可能。
③浜へ戻り、浜での作業を見学する。
④一通りの作業が終わったら、
朝食を食べぶらぶら過ごす。

【鮎川の主な漁業】

Ⅰ. 定置網漁
4-12 月
手順：
①早朝に漁場へ
②網を上げて魚をとった後網をかけなおし、浜に戻る
③浜で仕分けをして出荷する

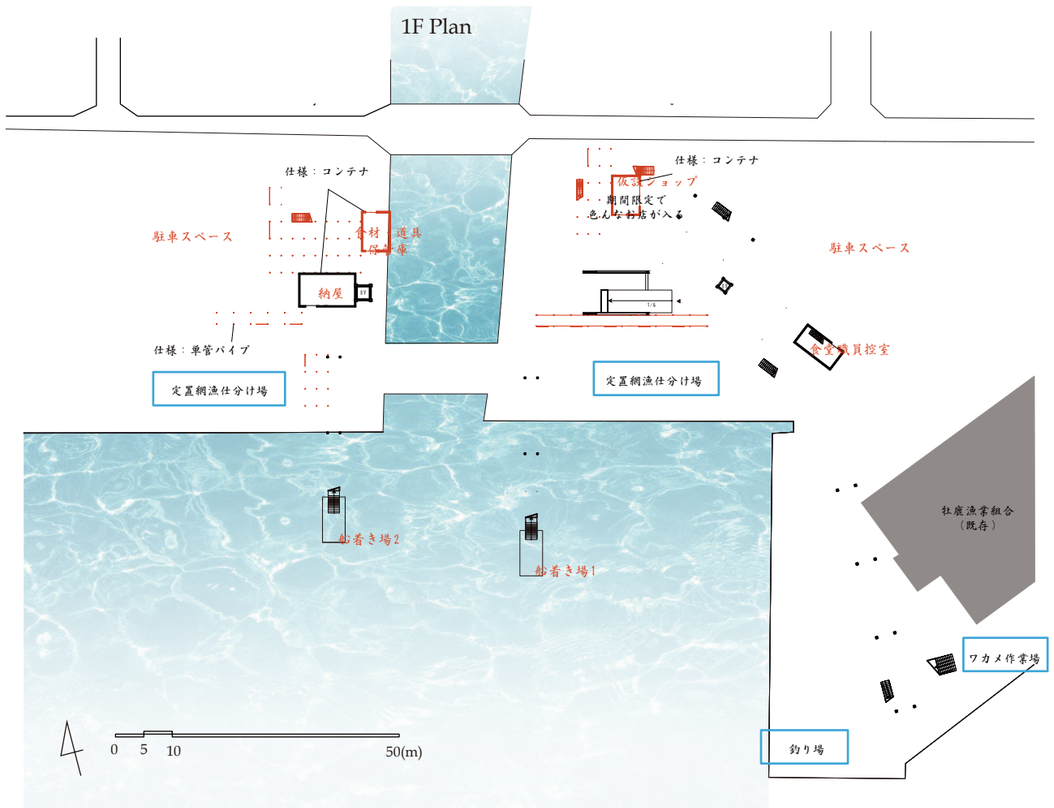
Ⅱ. 銀鮭養殖
10-11 月：稚魚を海上の生簀へ
11-3 月：早朝と夕方の二回ずつ餌やりをする
4-8 月：水揚げ
手順：
①早朝に漁場へ
②銀鮭を網ですくい上げ、船上で処理、保冷
③浜

Ⅲ. わかめ
2-3 月
手順：
①早朝にわかめを刈り取る
②浜でわかめを海水で茹で上げ、すぐに冷やす
③芯を手作業でとる

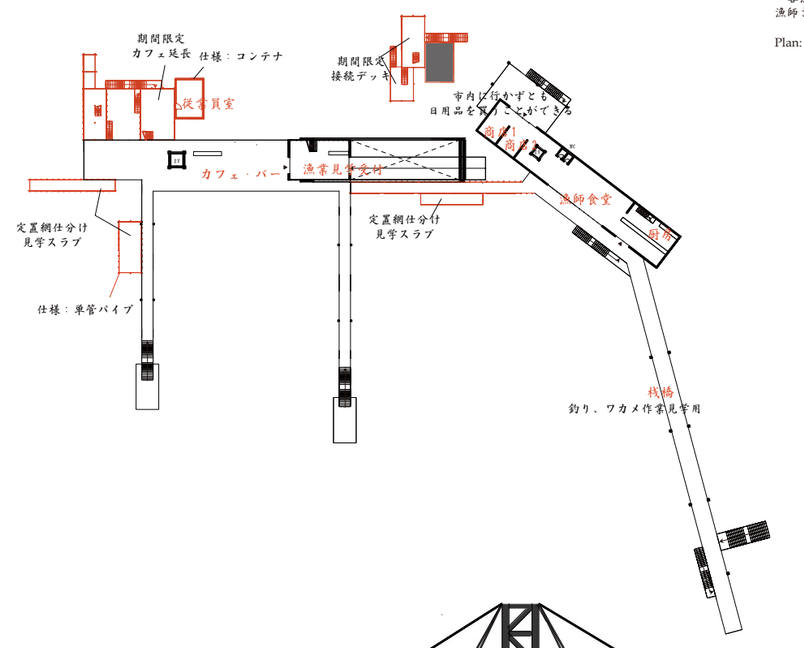


South Elevation

1F Plan



2F Plan

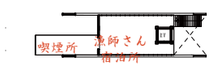


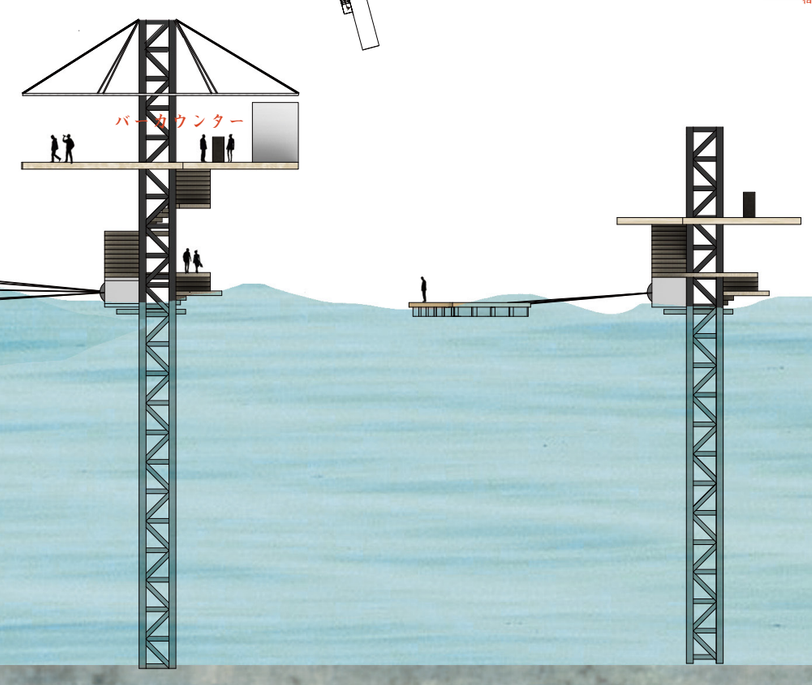
［仮設部分］
　各漁業が盛んな時期に応じて、単管パイプと足場により空間を増やす。そこは漁の見学場やカフェなどの空間となる。漁師さんの仕事の動線の妨げにならないよう配置する。

Plan: 赤線→仮設部　　黒線→常設部

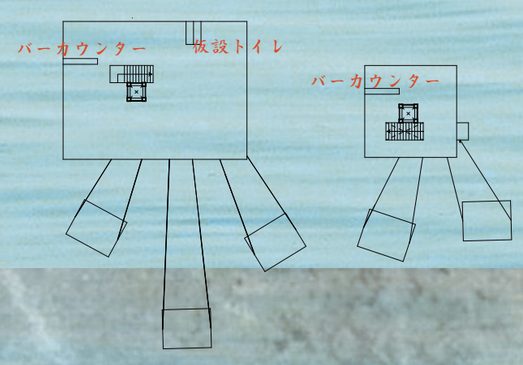
3F Plan

4F Plan





Program：海へのいざない（水上建築）



Plan

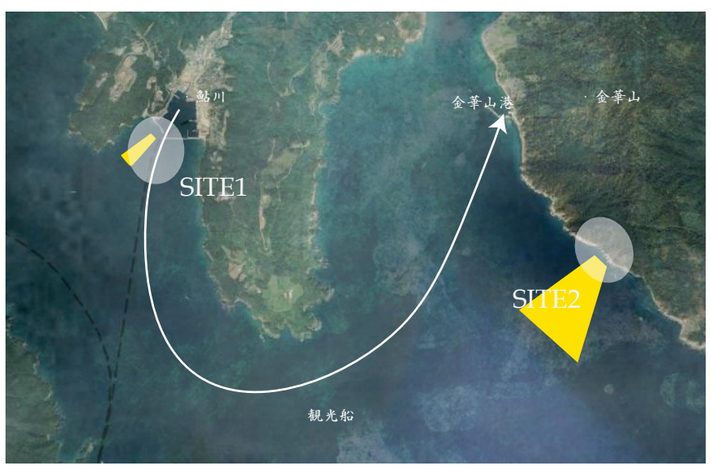
North Elevation

0　5　10　50(m)

SITE 1

SITE 2

South Elevation



●SITE1

場所：鮎川浜入口部分
対象：銀鮭養殖（餌やり：11-3 月、水揚げ：3-8 月）
対景：鮎川御番所公園、網地島長渡港
機能想定：お酒を飲む、お茶を飲む、銀鮭漁見学、餌やり体験、景色を見る、くじら祭りの第二会場

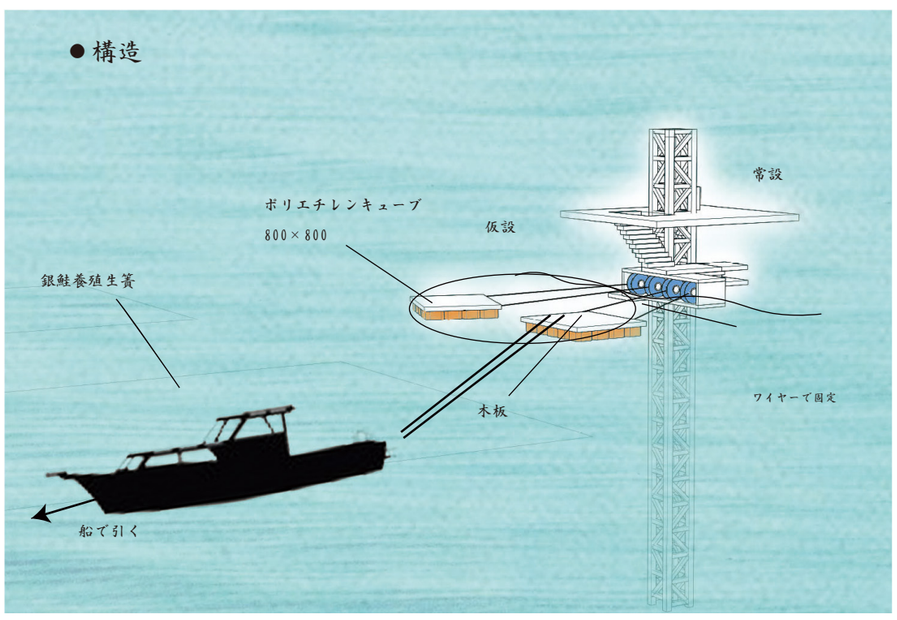
●SITE2

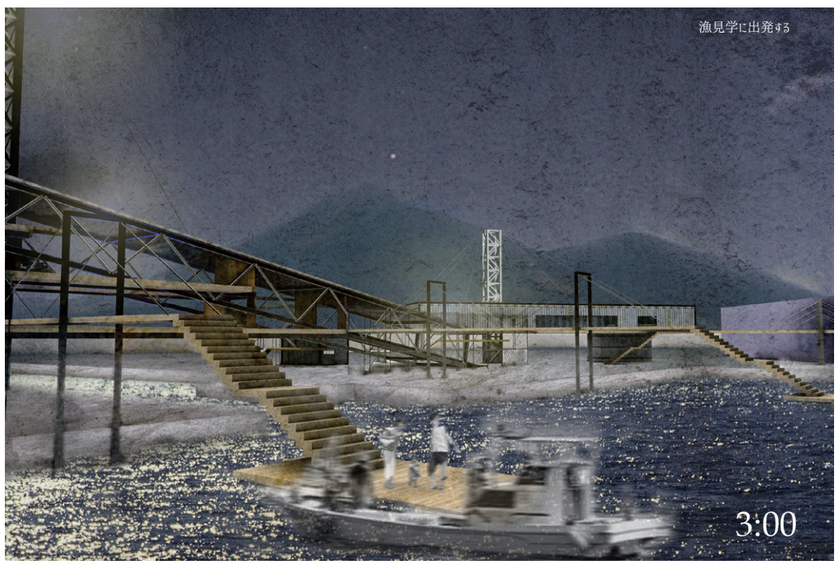
場所：金華山南側
対象：定置網漁（4-12 月）
対景：鮎川御番所公園
機能想定：お酒を飲む、お茶を飲む、金華山の観光スポットになる、定置網漁見学、海遊び（夏）、景色を見る、くじら祭りの第二会場

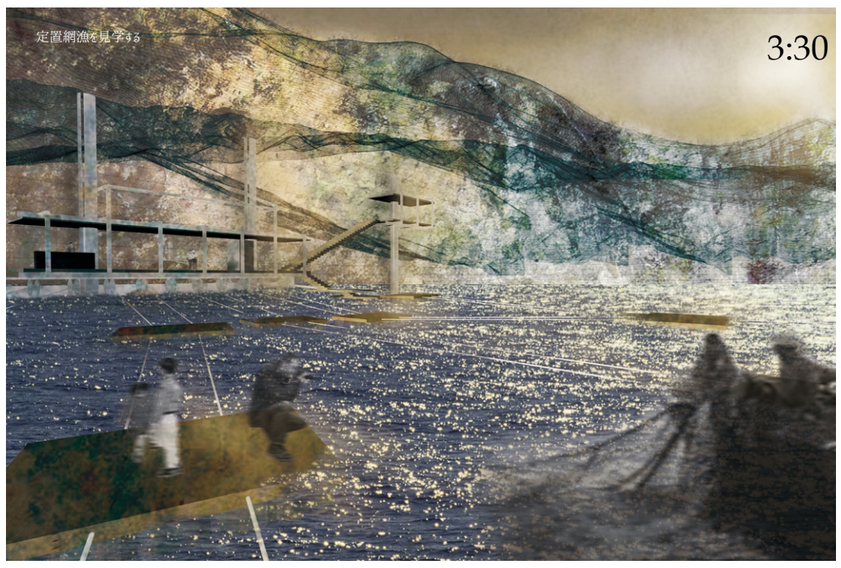
見学に行く先の漁場のそばに、水上建築をつくる。海上に建築があることで、漁を見る以上の体験を生む。さらに内部の人、漁師さんまでも新しい海上での過ごし方に気付く。

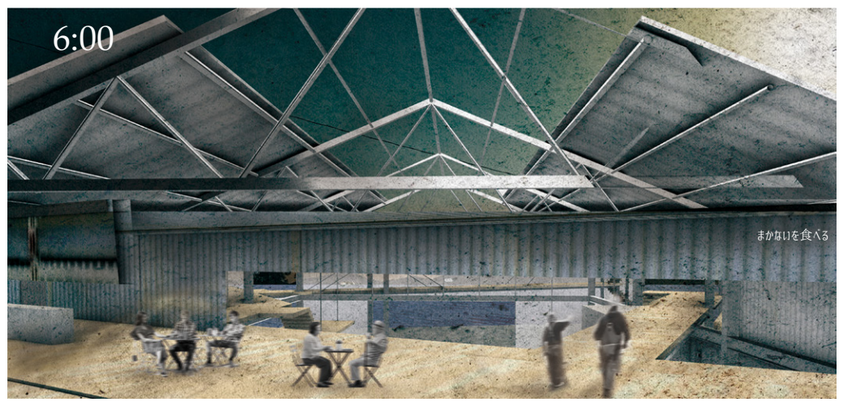
常設と仮設の混合型とする。
　ワイヤーに木板とポリエチレンキューブによるユニットを通すことで、自由に伸び縮みができる。伸ばす際は船で引っ張る。縮める際は機械で行う。対象とする漁の時期が終われば取り外す。
　この構造によって、くつろぎながらも近い位置で漁を見学できる。

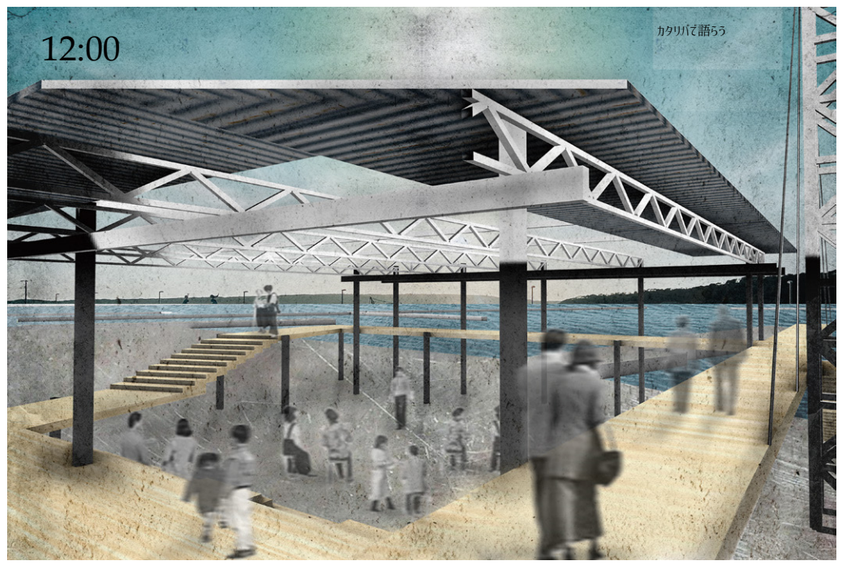
● 構造

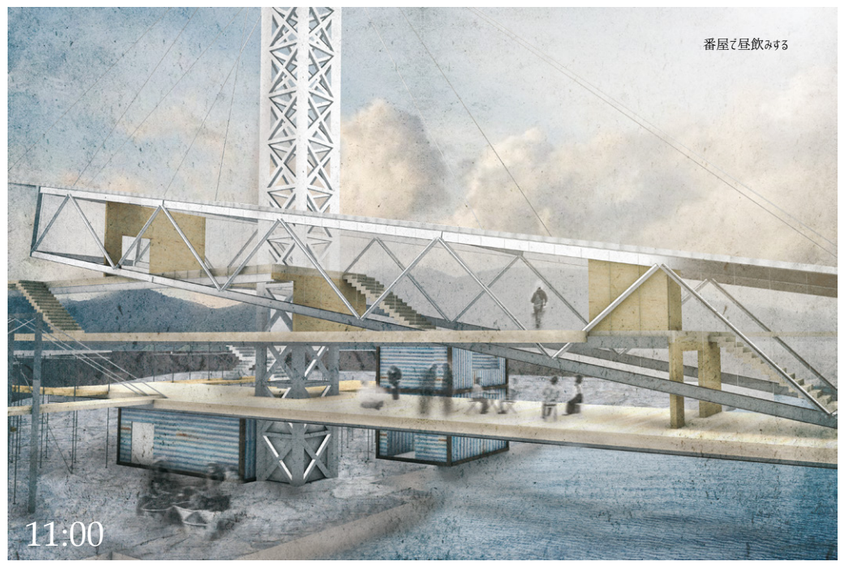


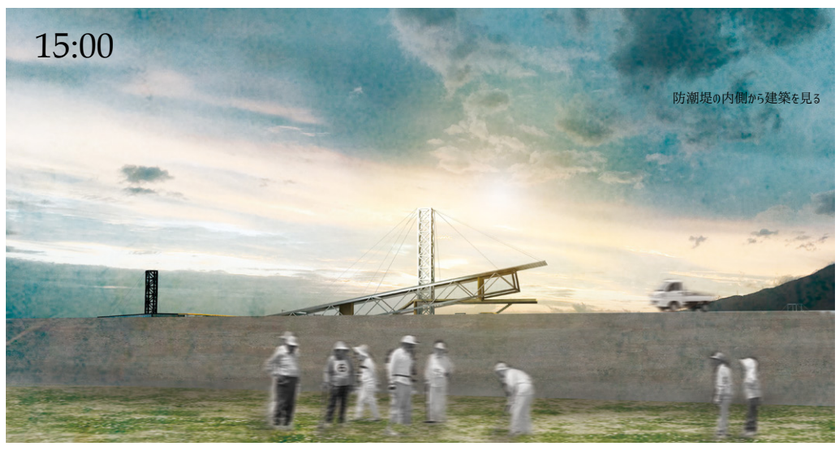


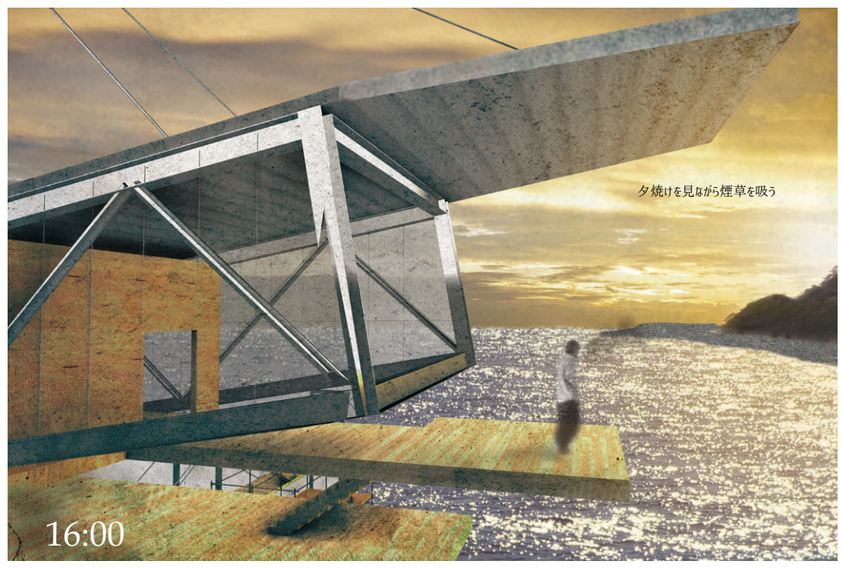


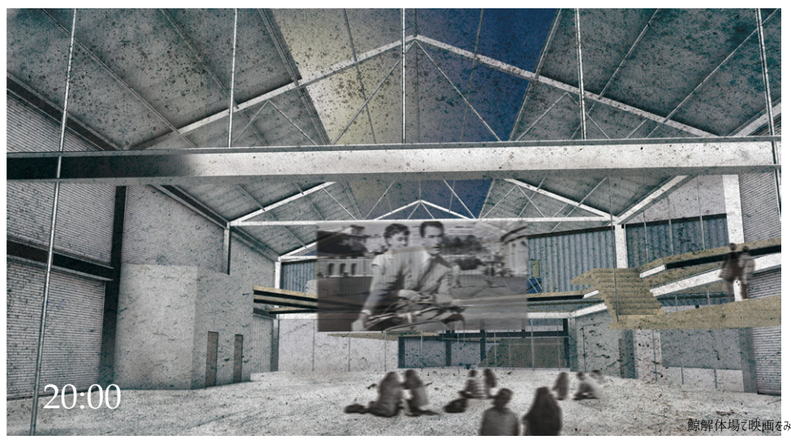












全て流され、

これからを思い描くことができない

被災地鮎川の、

一つの未来像を

示すことを目指した。

磯に生きるを灯す